
夢...現実

Real

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢…現実

【Zコード】

N4745D

【作者名】

Real

【あらすじ】

作者体験談ホラー系夢なのか現実なのか…分からぬ恐怖感

(前書き)

初投稿です。文章の間違い、書き方などにつきましては不明な点があるとは思いますが、了承下さい。

「あつ…夢？」金縛りが解けて起きた。Sは現実か夢か分からなくなつて目が覚めた。

枕元にあつた携帯電話の時計見ると、午前2時を回つたとこだ。今、何が起きたか分からない。熱帯夜で汗がかくほど暑いのに部屋には寒氣がするほど冷たい空氣が、流れている気がしていた。ゆっくり頭の中で今起きた事を冷静に考えてみた。まず、突然金縛りにあつて、恐る恐る目をゆっくり開いた。そこにはSの腰の辺りでノースリーブで膝下まで位の白いワンピースのような服に裸足で細身の大体20代後半位の女性がいた。

ものすゞくSの顔を覗き込むような視線があった。Sはヤバイとすぐを感じた。Sはすぐに強く目を閉じた。「髪の長い女の人…だ。死んでる！怨み？ものすげー怒ってるし…やだ！」Sは頭がパニックになつていた。

「どーしよう…」そーしてゐる間にも、女の顔がだんだんSの顔の前に近づいてくる。

そして、口から何か聞こえてくる。「…す。死…ね…。殺…す。」何か他にも言つてるような気がしたが、聞こえない。「何？」もう訳が分からなくなつていた。

さらに女の顔はSの耳元まで近づいていた。

女の口から背筋が固まるほど冷たい息が、Sの耳元でブツブツ言つてゐる。

何か分からぬが、恐怖が通り過ごしたのか、Sの頭がおかしくなつたのか、女の言つてゐる

内容は分からぬが、何かだんだん心地よくなつていた。

「何だろ？…気持ちがいいな。」

そんな事を思つてると、「ドン」と耳元に何か落ちてきた。「何！？何か耳元にある」

体を横にしてみて、そつと目を開いた。真っ暗で今まで目をつぶっていたから、最初はぼんやりで分からなかつたが、徐々に見えてきた。

「……何だらう？　つ！足だ！しかも、足首から上がり…女の足！何、何で、何でよ！」

Sの顔の横には青白く冷たい裸足があつた。

びっくりして、顔を反対側にそらした。もう気持ちが悪くなり吐き気がしてきた。

誰か助けて…

声が出ない。「あ…あ…」

このまま、向こうの世界に連れて行かれるんだなあ…

諦めつつ、頭で勝手に謝れば、何とかなるかも…

意味は無いかも知れない、そんな事を思つて、ひたすら謝った。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

そんな事しても意味はないとわかつているのに…誰にも聞こえないのに、声がでないのに

思いつきり謝った。「本当にごめんなさい。許して。」

「助けて下さい…。お願ひ…お願ひします。」

それから、しん…と部屋が静かになつた。

「はつ！金縛りが解けたんだ」体がやつと動く。顔だけ動かし、部屋を見渡す、誰もいない。

今の何だつたのだろう。

「夢…？じゃないような…現実か？でも…」あまりにもリアルな感じだ。

そんな事を思つていたがまた、深い眠りに就いた…。

朝、起きるまでは、何事も無かつた。何だつたのだろう？

女人は…？何をしにSの所に来たのだろう。理由は今も分からない。

でも、たまに夢に出てくる…。Sを怨んでるような冷たい目が…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4745d/>

夢…現実

2011年1月12日20時11分発行